

# 似非ビルドゥング批判—テオドール・W・アドルノのビルドゥング論について

ローター・ヴィガー

(訳 花井洸太・山名 淳)

ビルドゥングに関する議論は批判的社会理論によって新たな局面を迎えた。ビルドゥングの社会的次元、すなわち社会の歴史的前提や機能に対する考察が新しくなったわけではない。新しかったのは、市民社会を批判する文脈におけるビルドゥングの分析であった。マルクス主義の伝統における社会批判はビルドゥングに対する分析や批判をも内包していた (vgl. Heydorn 1970)。

ビルドゥングの危機や〈ビルドゥングの衰退〉への不満は常にあった。先行世代は、かつてビルドゥングということで理解されていたことやビルドゥングの表れとみなされていたことが後続世代には欠けているとみなしていることが多い。そのような先行世代からすれば、若者たちは無教養であるか、せいぜいのところ似非教養ハルブビルドゥングの持ち主でしかない。また、これらの事態に責任を負うべき教育機関はもはや教養を授けるのではなく、無教養ウンビルドゥングを助長しているとして批判される。

テオドール・W・アドルノはこのような嘆きや危機診断、また教育改革についても疑問を投げかけている。彼は「ビルドゥングの衰退の兆候があらゆる場所で確認されるということ」(GS 8, S.93)を否定しているのではない。彼が必要と考え、また主張しているのは、そのような兆候を社会の構造全体の一部として理解することであり、また体系的な理論によってそれを説明し、そうした理論においてビルドゥング概念をも捉え直すということだ。

ドイツに限ったことではないが、ビルドゥングは今ではある種の否定的な意味における客観精神と化してしまっている。こうした事態のもとになっているのは社会の運動法則そのものであり、さらにはビルドゥング概念そのものではないだろう。ビルドゥングは似非ビルドゥングとして社会に浸透し、偏在する疎外された精神となってしまった (GS 8, S.93)

啓蒙が要請していることに反して似非ビルドゥングが啓蒙を介して普及し支配的になってきたというパラドックスこそ、理論的な努力と飽くなき批判が向けられるべきものである。アドルノが必要と考えているのは、社会やその発展の法則性に基づく厳密な理論によってビルドゥングの歴史を説明することである。彼のテーゼによれば、ビルドゥングの衰退と似非ビルドゥングの普及は最初からビルドゥングに組み込まれており、その衰退史はビルドゥングの一部であるとされる。この考え方は非常に大きな反響を呼んだ。

一般的には、ビルドゥングはビルドゥングウンビルドゥングの欠如ハルブビルドゥングや似非ビルドゥングデア・ガビルデットと区別される。また、教養人は似非教養や無教養の大衆とは一線を画すとされる。だが、アドルノにとってこうした区別は受け入れがたい。なぜならビルドゥングは「似非ビルドゥングと化して社会に浸透している」からである。ビルドゥングに取って代わったのは、あらゆるところに遍在して精神生活に影響を与えている似非ビルドゥングである。アドルノによれば、似非ビルドゥングは、ビルドゥングの欠如と同様に、ビルドゥングを前提としておらず、ビルドゥングの前段階ですらない。似非ビルドゥングはビルドゥングが意味するあらゆることを妨げてしまうというのである。

## 1. テオドール・W・アドルノと批判理論

アドルノ (Theodor Wiesengrund Adorno, 1903-1969) は、哲学、音楽学、心理学、社会学を学んだ後、1924年にエドムント・フッサールについての論文で博士号をフランクフルト大学で取得した。同年、彼はウィーンのアルバン・ベルクの下で作曲を学び始め、音楽理論や音楽批評に関する業績を公にするようになった。1931年にはフランクフルト大学でキルケゴールについての論文によって教授資格を

得たが、国家社会主義の台頭によって1933年に哲学に関する授業担当の権限を剥奪された。彼は1934年にイギリスへ、また1938年にはアメリカへと移住した。1938年、アドルノはかねてから関係の深かった「社会研究所 (Institut für Sozialforschung)」の一員となった。この組織を1931年にフランクフルト・アム・マインに創立したのは、アドルノと同じくアメリカ合衆国へと移住したマックス・ホルクハイマーであった。彼は1950年に同研究所をフランクフルト・アム・マインで再建した。1942年から44年にかけて、アドルノはホルクハイマーとともに『啓蒙の弁証法』を共同執筆した。同書がアムステルダムで刊行されたのは1947年のことである。1949年、アドルノはフランクフルト・アム・マインへと戻ると、亡くなるまでそこで哲学と社会学の教授を勤めた。1950年、アドルノも参加した実証研究の成果である『権威主義的パーソナリティ』が刊行された。彼の主著としては、『ミニマ・モラリア』(1951)、『否定弁証法』(1966)、『美の理論』(1970) などがある (vgl. Schweggenhäuser 1996, Scheible 2002)。

アドルノは、マックス・ホルクハイマー (Max Horkheimer, 1895-1973)、ヘルベルト・マルクーゼ (Herbert Marcuse, 1898-1979)、そしてユルゲン・ハーバーマス (Jürgen Habermas, 1928) とともに、いわゆる〈フランクフルト学派〉の著名な代表者の一人であった。〈フランクフルト学派〉とは、「社会研究所」およびその機関誌「社会研究ジャーナル」を取り巻く哲学者や社会学者のサークルである。この研究者集団の特徴をなしているのは、ホルクハイマーによって提唱された「社会批判理論」である。フランクフルト学派にとっての「社会批判理論」は、従来の哲学や学問における「伝統的な理論」に対置されるものであった (vgl. Horkheimer 1937 / 1988)。

社会批判理論のねらいは、社会における経済の規則、個人の心理状態、そしてさまざまな文化領域の発展の間にある連関を指摘しようとする社会理論の構築である。そうした理論の分析では、個人の思考様式を制約している社会的条件も考察される。批判理論は、社会状況の批判的分析と支配や搾取から人間を解放するという要求とを結びつけるのだ。〈批判理論〉は、カール・マルクスによる政治経済批判の影響を受けながらも、ドグマと化したマルクス主義的思想を支持するものではない。批判理論では、

ジグムント・フロイトの精神分析を通してマルクス主義的な理論を拡張することによって、資本主義が主流となった国々では労働者による社会主義革命が生じないことや、労働者階級の大衆が権威主義的で全体主義的なシステム (たとえばファシズムやスターリニズム) に統合されてしまうことを説明しようとして試みている。第二次世界大戦やホロコースト、さらにはアメリカでの文化産業を経験したことで、ホルクハイマーとアドルノの研究は徐々に懐疑的で悲観的な性質を強くしていった。

彼らの共著作である『啓蒙の弁証法』(1947 / 1981) では、資本主義社会や教養市民層による支配に対する批判は、西洋における理性の伝統に対する根本的な批判によって補足されている。ホルクハイマーとアドルノは、理性の歴史を自由への進歩として解釈したヘーゲルとも、また無階級社会による人間解放と解釈したマルクスとも異なって、理性がその反対物へと転覆することとして理解している。すなわち、彼らは人間性が非人間的な支配下で破綻していくこととして理性の歴史を解釈するのである。人間は理性によって自然や世界を支配して技術的に利用できるようになるが、そうした「道具的理性」が優勢になることで完全な支配と野蛮がもたらされる。これが文明の弁証法である。批判理論は革命への希望を捨て、そうした希望の受取手である革命の主体を喪失したが、その後批判理論、とりわけアドルノが重要とみなしたのは、道具的理性や「同一化する思考」の支配が破綻し、抑圧されたものや「同一化されていないもの」が経験されるような避難所もしくは理性の別の形態を見出すことであった。アドルノによれば、そのための媒体は芸術である。彼によるビルドゥング論の分析もまた、こうした理論的な枠組みのうちにある。だがその後、ハーバーマスを始めとするフランクフルト学派の他の代表的論者たちは、ホルクハイマーによる初期の構想にあった解放プログラムの方に再びより強い関心を向けるようになっていった。

## 2. 古典的ビルドゥング理念の挫折

アドルノによれば、ビルドゥングとは解放であり、人間が依存から自由になり、自律性を獲得することである。ビルドゥングが意味するのは、何よりもまず自分自身の内的自然に従属していることの克

服である。それは衝動や目先の欲求を鎮めることを意味する。さらにいえば、ビルドゥングとは外的自然に従属していることを克服することである。自然に関する科学的知識や自然利用の技術的可能性を増大させるといった点で進歩を遂げるということがそれに当たる。この場合、内的自然および外的自然の操作は抑圧あるいは破壊として理解されてはならず、〔自然の〕変形や保持として理解されている。「絶頂期における哲学的なビルドゥング理念は、自然存在を保持しつつ形成しようとするものであった」(GS 8, S.95; vgl. Horkheimer 1952/1985, S.410)。社会状況との関わりでいえば、ビルドゥングは既存の権威や非合法的な支配構造による他律状態を克服することを意味する。この点においても、ビルドゥングは個人が可能なかぎり十分な自己決定を行うことを目指している。

〈古典的なビルドゥング論〉では、個人のビルドゥングは社会や世界政治のよりよい状態に人類が歴史的に進歩していくための本質的な契機として理解されていた。この点でアドルノは古典的なビルドゥング論に従っていた。そのような進歩の特徴とされたのは、自由と自己決定の増大である。そうした進歩は啓蒙やビルドゥングによって可能になるというわけだ。個人が啓蒙されるほど、社会全体が啓蒙され、また進歩するということである (vgl. GS 8, S.97)。

アドルノが用いたこのビルドゥング概念は、18世紀末から19世紀初頭に理論的に発展し、市民社会の時代を特徴づけるものである。ビルドゥングの理念は「市民とともに解放されたのであった」(GS 8, S. 97)。ビルドゥングが対峙していたのは、中世のキリスト教の時代や封建的な身分社会の伝統的な教育目標や人間像であり、また権力や権威の古き構造であった。「ビルドゥングの実現は、自由と平等を旨とする市民社会の実現と対応するはずのものであった」(ebd.)。だが、この約束が守られることはなかった。

市民社会はあらゆる人びとにとってビルドゥングが自由や平等と同じように求められるべきことを強調したのだが、実際には限られた人びとにとってのみそのことが実現したにすぎなかった。アドルノによれば、市民社会とは〈階級社会〉である。そこでは、ある階級が豊富な社会の資力を享受するのに対して、人口の大部分を占める他の階級はそこから排除されている。教養市民層にとって、ビルドゥング

は経済的な成功や政治的な強制力的手段と証であった。それとは対照的に、資産もなく生計を立てるために働かなければならなかった者たちはすべてビルドゥングから排除されていたというのである。

形式上は平等な社会にあっても、ビルドゥングを独占して意のままにできたのは有産階級であった。資本主義的な生産過程による非人間化は、ビルドゥングに至るためのあらゆる前提、なかんずく閑暇を、労働者たちから奪ってしまった。(GS 8, S.98f.)

社会のあらゆる成員が法のもとで平等で、基本的にビルドゥングへのアクセスに開かれているにもかかわらず、教育サービスに投入する資金が十分ではなく、教育費をまかなえなかったり、それどころか家計のために子どもたちを働かせざるをえない人びとは、経済的な制約によってそこから排除されてしまう。アドルノによれば、限られた人びとによる〈ビルドゥングの独占〉およびその他の人びとの〈ビルドゥングからの排除〉の原因は、とりわけ資本主義下の労働にある。労働は利潤の最大化という基準に則って組織されており、労働者に対してあらかじめ定められており、他律的であり、なすべきことが多いために消耗を強いるものであり、単調かつ過酷である。苦難と労働の強制を余儀なくされた生活のなかにある労働者たちの「自由時間」は、アドルノがビルドゥングの基本的な前提と考えていた「閑暇」の余地を与えるものではない。搾取と疎外はビルドゥングの正反対に位置するものだ。結果として、労働者たちは無教養なままとなる。

だが、ビルドゥングの理念と矛盾しているのはプロレタリアートや農業従事者の生活環境や労働環境だけではない。ビルドゥングを独占し、労働者とは異なってビルドゥングに必要な閑暇を手にはしているはずの教養市民層もまた、自らのビルドゥングの理念を満たすことができないでいる。アドルノはビルドゥングの理念の実現（の失敗）の分析をさらに一歩進めている。

アドルノは市民社会における〈文化の矛盾〉を解釈することによって古典的なビルドゥング概念の問題を明らかにしている。「ビルドゥングとは、主体側の献身による文化にほかならない。ただし、文化には二重の性格がある」(GS 8, S. 94)。ほとんどの

場合、文化は「精神文化」(ebd.) であると理解され、文学、絵画芸術、音楽、哲学などを指す。そのため、芸術や言語はビルドゥングの媒体とみなされる。個人が自由に活動し、自らの力を自由に展開できるのは芸術や言語の領域である。しかし、文化やビルドゥングに対するそのような理解は一面的である。というのも、そのような理解では、政治、経済、自然科学、技術がそこから除外されているからである。文化が精神生活だけに限定されるのであれば、市民社会の「実生活」(GS 8, S. 95) の基本領域を自由や環境の人間化の原則に従って整えることはできない。文化は普遍性を要求する。まさに資本主義経済とは対照的でもあるのだが、文化と結びついて自由と人間性が約束されるのである。だが、文化が社会を構築するわけではない領域に限定され、精神文化として自己充足してしまっているために、市民社会で経済の法則性が有する際限のない作用に対して文化は無力となる。「文化の二重性格の均衡が保ちえたのはいわば東の間のことであった。文化の二重性は社会の調停されることのない敵対状態から生じている。文化はそうした敵対状態を解消しようと願うのだが、〔芸術や言語の領域に限定された〕単なる文化にとってそれはかなわない」(GS 8, S. 96)。

文化だけでなくビルドゥングもまた社会に対して両義的な関係にある。アドルノによれば、ビルドゥングの理念が約束するのは社会の人間化であり、支配、不平等、搾取、疎外の克服である。ビルドゥングの理想は、利己的な富の蓄積を特徴とし、すべての成員の幸福を実現できないような社会のうちにある。

言うまでもなく、ビルドゥングの理念のうちには身分や搾取のない人類の状態の理念が必然的に要請として含まれている。ビルドゥングの理念が多少ともその点で譲って、社会的に有用な労働として認められる個別的な目的の実践に巻き込まれてしまうやいなや、それは自己破綻してしまうであろう。だが、ビルドゥングの理念は純粹であれば罪がないというわけではない。それはイデオロギーになる。(GS 8, S. 97f.)

アドルノにとって、ビルドゥングが経済的成功への関心に巻き込まれてそのために奉仕するようになる

ならば、ビルドゥングへの期待は裏切られてしまう。資本主義的な経営利害や競争に参加するための手段となり、人間性重視の社会状態を創るという理念に反してしまう。だが、ビルドゥングが——経済的・政治的目的から切り離された純粹なビルドゥングとして——既存の「人事百般の仕組み」(GS 8, S. 95) から距離を取り、美的な領域へと引きこもったとしても、やはり期待を裏切ることになる。「手段の独裁や強靱ではあるが貧弱でもある有用性からの自由というビルドゥングの夢は、そうした独裁によって打ち立てられた世界の擁護へと歪曲されるのである」(GS 8, S. 98)。

### 3. 似非ビルドゥング

「ビルドゥングの枯死、似非ビルドゥングの社会への普及、その大衆への浸透、といったテーゼ」(GS 8, S. 101f.) によって、アドルノは市民社会における知的生活の特徴となっている一般的な傾向を説明しようと試みている。アドルノは自身のテーゼを明確にするために、〔ビルドゥングが〕教育の各課程や各段階の修了時における試験や資格証明書〔と同一のものとして誤認されていること〕、ビルドゥングが地位や名声とみなされていること、文化産業によって生じる愚鈍化など、さまざまな事実言及している。アドルノは〈似非ビルドゥング〉の一般特徴を次のように表現している。「似非ビルドゥングの風潮のなかでは、商品として物象化されたビルドゥングの現実、その真理内容や生きた主体との生き活きた関係性を犠牲にして存続している」(GS 8, S. 103)。アドルノの主張の重要性は彼自身が示す例に最もよく示されている。

「試験によって保証され、場合によっては検証されるようなビルドゥング」はアドルノにとって「期待の残骸」(ebd.) でしかない。

それ自体が規範となり、資格となったそうした操作可能なビルドゥングは、セールスマンの口上に墮した一般教養とほぼ変わらないものである。(GS 8, S. 106f.)

本来のビルドゥングはテストすることも操作することもできないし、またそのための正当な規準を定めることもできない。個人におけるビルドゥングの過

程は、教育課程における既成の時間枠に収まるものではない。たとえば文学や音楽にともなう個人の経験はテストによって捉えられるものではないし、また芸術、哲学、学術にともなう経験には画一的な操作はそぐわない。アドルノによれば、ビルドゥングを構成する諸要素は〈学校組織〉によって妨げられてしまう。アドルノの見解では、テストや試験を目的とした知識の細分化、主体的経験の規格化や制限、資格の実用性志向、詰まるところ個人が操作可能であり統制されることは、ビルドゥングの特徴なのである。中等教育機関や大学が「それらが有する特権の壁の向こう側で」(GS 8, S. 108) 人間の諸力の発展としてのビルドゥングを少数の者たちに対して実現してきたとしても、それらの機関は教育目標や成績や試験によって、ビルドゥングに代わって似非ビルドゥングを組織化し、促進してしまっているのである。

ビルドゥングは個々人によって異なるものであり、それぞれの関心領域や経験がどのようなものか、世界のどの部分に適応しているか、またその主体がいかなる能力を持ち合わせているかによる。市民社会は職業上の階層や競争、学校で取得した資格を特徴としているために、個人のビルドゥングは社会的な差異や地位を条件づけるものであり、またそれらを表現するものとなる。「いつまでも絶えることのない身分社会はビルドゥングの残滓を吸い尽くし、身分の象徴へと変容させてしまう」(GS 8, S. 108)。たとえばオペラや演劇を訪れたとしても、それは作品を経験したいがためではなく、そのような催し物に居合わせたということ、作品を眺めたということ、そうした作品の愛好家たちからなるごく限られた社会集団に属しているということを目的としているような場合、〈似非ビルドゥング〉がそこに見出されるのである。あるいは、家庭の書斎にある本を社会的地位の高さを誇示する象徴として見せることも似非ビルドゥングである。そうした場合に重要とされるのは、その本を読んだりテーマや真偽について議論することよりも、本を所有しているということの方である。似非教養人は教養人を模倣し、あることを真摯に検討するビルドゥングの過程を経ることなくビルドゥングの特権性を分かち合おうとする。アドルノは似非ビルドゥングを「自分の思い通りにしたが、何にでも口を出し、専門家のような振りをしたり自分が専門家の一人であるとしたり

するような[……]態度」(GS 8, S. 114f.)と形容している。似非教養人はいつでも物知り顔で、あらゆることをすで見聞したことがあり、何に対しても持論をもっている。だが、そうした人物が有する情報と知識は想定内の知でしかなく、本物の経験に由来するものではない。

「物事」の概念について論じる際、似非教養人は真実や規範の正当性、あるいは美的性質を検証によって追究するのではなく、問われている事象を既成の事実とみなして、自分の図式や偏見に当てはめることで満足してしまう。似非教養人はすでにすべてを知っていることになっているので、物事を認識し理解しようとする努力を避けてしまう。所与のものがそのまま受け入れられてしまうのだ。アドルノによれば、似非教養人はビルドゥングの特徴である批判的な距離感と独立性を欠いている。似非教養人は社会の要請に順応することを望み、あたえられた状況下で成功を収めようとしてしまう。そのように〈一体感〉を基準や特徴とするに至るのである。批判でさえ社会と一体化してしまう。

しかし似非ビルドゥングの精神は、そのために順応性を誓うようになる。18世紀にビルドゥングが既成の権力に対してうちに宿していた批判と対抗のための距離感がビルドゥングから奪われているというだけではない。すでに存在しているものを肯定し精神がそれに追従することがそれ自体の内容や正当性の証となるのである。批判とは言えば、自らは騙されることなく相手にこちらの要求を受け入れさせる純然たる狡知に墮し、出世の手段と化しているのである。(GS 8, S. 115)

ビルドゥングの枯死とともに、その批判的な潜勢能力もまた失われてしまう。似非教養人が権威や社会の支配状況を批判することがあったとしても、それはよりよい社会生活を目指してのことではなく、自分自身の知的優位性を証明することを目的としてのことである。似非教養人の「批判」は競争のなかで自らを貫き通すことに資するものではあっても、競争を克服しようとするものではない。

だが、アドルノは似非教養人の態度を記述し批判しただけではない。彼はこの種の似非ビルドゥングを可能にし醸成する社会的な機構を突き止めようとしている。彼は似非ビルドゥングの主体である人間

のみならず、似非ビルドゥングの客体的側面としての文化や社会的前提をも批判するのである。資本主義では、ビルドゥングと文化は市場となり、陶治財ビルドゥングスギューターや文化財は商品として扱われる。アドルノによれば、ビルドゥングの衰退と似非ビルドゥングの社会への浸透は〈文化産業〉の結果である。説明の際に彼が目しているのは、とりわけハリウッド映画産業や、ラジオやテレビなどの大衆メディアである。文化産業は、ホワイトカラーやブルーカラーからなる「大衆」に陶治財ビルドゥングスギューターを提供し、それによってビルドゥングの特権や社会的権力から排斥されている人びとの「統合」を果たしているのである。「市場メカニズム」によって陶治財ビルドゥングスギューターは大衆の意識に適合するのだが、そうした大衆の意識をアドルノはあからさまに「愚鈍」と表現している。こうして教養は似非ビルドゥングへと退化し、もはや啓蒙と批判に資することはなくなっていく。アドルノによれば、文化産業は似非ビルドゥングを必要としており、同時に文化産業が求めるプログラムを通して似非ビルドゥングをより強固なものにする。つまり、文化産業は愚鈍さから利益を得つつ、愚鈍さを強化し、それどころか愚鈍さを生み出しているのである。

アドルノは、「こうした現在の諸条件のもとにある通俗化したビルドゥングが自ずと啓蒙的な価値を有しているということ」(GS 8, S. 111) に対して懐疑的である。なぜなら、売り買いできる商品としての陶治財ビルドゥングスギューターを誰もが手に入れられることによってせいぜいのところ手短に何かを習得できるようになるだけであるからだ。その結果として、理解や経験は中途半端なものとなり、まさにビルドゥングが妨げられてしまう。「ビルドゥングの名にふさわしいもので、無前提に体得できるものは何ひとつない」(GS 8, S. 113) からだ。最悪の場合、商業化と通俗化は芸術作品の客観性を歪めてしまう。たとえば、詩の一節やオペラのアリアなどの「最も美しい箇所」だけが複製されるにとどまることによって、あるいは「芸術作品がそれを創作した人物の」伝記に基づいて解釈がされるにとどめられることによって、芸術作品の客観性は改竄されるのである。これもまたビルドゥングを妨げてしまう。

アドルノは似非教養人の思考の特徴としてとりわけ「個人化」を挙げて次のように説明している。

……個人化の傾向。すなわち、〔芸術作品が〕客観性を備えているかどうかということの甲乙が個々人に帰せられたり期待されたりしている。妄想じみた個人崇拜が、世界の脱人格化と共に進行している。(GS 8, S. 118)

似非ビルドゥングの思考は短絡的であり、それゆえに事実を適切に理解することができない。なぜなら、そうした思考は(失業や犯罪などの)社会現象を(資本主義の)社会的構造に帰するのではなく、個々人の失敗や罪悪として解釈し、他の人びとや救世主に状況の改善を望んでしまい、社会が連帯することへと変化していくことには期待しないからである。アドルノがある独裁政権の崩壊を描いたテレビ番組の脚本を批判して例示したように、文化産業はそのような〈個人化する思考〉を反映している。

全体主義国家は貪欲な政治家の性格的欠陥がもたらす帰結であり、その崩壊は視聴者が共感する高貴さによるものであるという印象が呼び起こされるだろう。ここでなされているのは、政治の稚拙な個人化である。(GS 102, S. 523)

同時に文化産業は、男性と女性、職業集団や異民族、世界情勢や物事を進める最善の方法などに関する広範囲に及ぶ〈偏見〉と固定観念を強化する(GS 102, S.518ffで挙げられている例を参照せよ)。

似非教養人は、自身の固定観念や偏見に基づいてしまうがために、先入観なく異質なものと出会う経験や何か新しいことへの準備を行う経験をすることができない。似非教養人と無教養人との相違はこの点にある。

目下のところ実際に作用している範型はイデオロギーめいた観念の集塊で、それが個人の脳裡にあって主観と現実の間に割り込み、現実フィルターをかけている。こうした観念は理性で簡単に取り払うことができないほど感情にまで取り憑いている。その集約された姿が似非ビルドゥングである。単なる素朴さや単なる無知としての無教養ウンゲビルデットであったならば、対象と直接的に関係し、懐疑や機知やアイロニーの力といった、まだ完全に馴致されていない人間がかえってふんだんに持ち合わせている特性の働きによって批判的な意識

にまで高めることもできた。似非ビルドゥングの場合にはそうはいかない。(GS 8, S. 104f.)

似非教養人はすでにあらゆることを知っている。それゆえ、似非教養人は先入観を持たずに物事に接近したりそうした経験をするができない。一方で、無教養人は物事に取り組むなかで自己形成していくことができるだろう。単なる無教養はビルドゥングの過程を阻害しないが、アドルノによればイデオロギー的な先入観や順応主義は阻害するのである。

#### 4. 批判的自省察としてのビルドゥング

市民社会においてビルドゥングが発展していった当然の帰結が似非ビルドゥングであるとするアドルノの分析は、〈批判のジレンマ〉を明るみに出す。

だが、社会に浸透した似非ビルドゥングのアンチ・テーゼとして、それ自体がここで批判的となるべき伝統的なビルドゥング概念のほかにも何も考えられないとすれば、それは困難な状況であるといえる。というのも、伝統的なビルドゥングは自らの可能性をなおざりにしたために問題のあるものであるにもかかわらず、それ以上によい基準が見当たらないからである。(GS 8, S. 102)

アドルノは似非ビルドゥングという現象をビルドゥング理念に依拠して批判しているが、同時にビルドゥングの理想もまた批判せざるをえなかった。というのも、ビルドゥングに付随するはずの人間化と解放の約束は十全に果たされなかったからだ。したがって、古きよき時代というありもしないものへの回帰に希望を託すこともできない。だが、伝統的なビルドゥングへの回帰への道が閉ざされ、社会的解放の機会がなおざりにされ、似非ビルドゥングへの批判が有効であり続けているとすれば、そもそも今日において別種のビルドゥングなどというものはありうるのだろうか。

社会に浸透してしまっている似非ビルドゥングの趨勢を免れている者が誰かいるかもしれない——と考える者はその誰かとして常に自分のことを想定しているものだ——と空想することもまた、む

なしい。意識の進歩と呼ぶに相応しいもの、つまり目前のものに対して幻想を抱くことなく批判的に洞察することに付随しているのは、ビルドゥングの喪失である。醒めた意識と伝統的なビルドゥングは両立しない (GS 8, S. 120)。

「目前のものに対して幻想を抱くことなく批判的に洞察すること」は、アドルノにとって代替手段がないものであり、ビルドゥングの喪失は不可避である。「矛盾に満ちた全体のなかにあつて、ビルドゥングの問題も二律背反に絡め取られてしまう」(GS 8, S. 119)。アドルノの分析と結論は、彼がその草稿を作成したビルドゥングについてのマックス・ホルクハイマーの学長就任演説 (1952/1985, S. 415ff.) で表明された考察と提案よりもはるかに過激で懐疑的なものである (vgl. Paffrath 1992, S. 119)。文化の無力さとイデオロギー的機能ゆえに、文化にすぎること、信頼することもできず、だからといって文化を清算する傾向を支持するわけにもいかない。そのようなことは「野蛮への逆行」(GS 8, S. 119)に加担することと等しいからだ。そのような二律背反から逃れることはできない。

精神が社会と一体化するかのようには溶解することなく社会的な正義を行使した場合、この時代にあつてそこに立ち現れるのは、ビルドゥングの根底が社会によって奪われてしまった後でビルドゥングにすぎるといふ時代錯誤である。ビルドゥングには、自らの必然的に変わり果てた姿である似非ビルドゥングに対する批判的な自省察という形でしか生き残る可能性がない。似非ビルドゥングは批判的な自省察を必要とするようになった。(GS 8, S. 121)

アドルノによれば、市民社会の矛盾した状況において、今日のビルドゥングは自らの衰退の歴史に対する批判的な自省察としてのみ存在しうる。目下のところ、自らの主張を貫くビルドゥングは〈自己批判〉と〈社会批判〉としてのみ可能なのだ。

#### 5. アドルノにおけるビルドゥング論の受容と現代的意義

アドルノのテーゼによれば、市民社会におけるビ

ルドゥングは「似非教養として社会に浸透」(GS 8, S. 574) し、「疎外された精神が蔓延」(GS 8, S. 93) した状態となった。古典的なビルドゥング論の支持者にとって、「精神」とは自由や理性が実現する領域であり、人間とは何であるかが定められる領域であった。だがアドルノによれば、個人の社会生活や精神状態は「疎外された精神」となってしまう。なぜなら、自由や理性、人間性についての主張は資本主義社会において実現されておらず、それどころか、市場と権力の原理が無制限に適用されて、個人に対して利潤の計算と状況への適応が求められるからである。地位、競争、経歴のためのビルドゥングが道具化され、文化産業によって「陶冶財」が市場に沿う形で創られていくなかで、物事の真理内容や個人による真正な経験の可能性は失われていく。似非教養人は物知りで、饒舌で、妬み深く、傲慢で、非合理で状況に従順であることを特徴としている (vgl. GS 8, S. 111ff.)。「遍く利害社会と化した社会の網目に囚われた」(GS 8, S. 575) 似非ビルドゥングの傾向から誰も逃れることはできない。したがって、「完全に管理された世界がもたらす視野狭窄」という如何ともしがたい状態にあって、ビルドゥングは社会とそのイデオロギーを批判し、批判的な自己省察を絶えず行う努力として存立しよう。そうしたユートピアの実現を見込むことが実際にはできないとしても、人間的な社会という幸福を約束し続ける批判として、ビルドゥングは存立しようというわけだ。

1960年代末以降、精神科学的教育学および経験的教育学と並んで教育学の理論に関する議論の主流となって——少なくとも約10年間にわたって——その方向性に影響を与えたのは、批判的教育学であった。フランクフルト学派の問題構成や理論を受容するなかで批判的教育学が関心を寄せたのは、とくにユルゲン・ハーバーマスの研究である。これとは対照的に、批判的教育学は「アドルノの理論を避けてきた」(Schäfer 2004: 7)。アドルノによる啓蒙批判、啓蒙の自己破壊的な傾向の指摘、そうした指摘が自己批判的な批判というアポリアへと至るといふ帰結、社会が不可避的に腐敗していくことに対する社会批判による省察。そうしたアドルノの特徴は、啓蒙主義の伝統に立つ教育学による要請に抵触してしまう(ヴォルフガング・クラフキにみられるように、そうした伝統的な教育学はアドルノの要請を実践

援用する試みにおいてさえ解放を目指している)。概して教育者はアドルノに「積極的な視点」を見出すことができないでいた。「肯定的なものの欠如」が「教育学においてアドルノが受容されてこなかった主因」(ebd., S. 129) であったように思われる。

その一方で、アドルノが受容されるケースもある。彼の「似非ビルドゥング論」はビルドゥング論における議論において主要なテキストである(アドルノの受容史についてはPeukert 1983; Wiggershaus 1986, S. 126ff; Albrecht et al. 2000を参照)。たとえばアルフレート・シェーファーは、アドルノを引き合いに出すことでビルドゥング論のアポリア的状况を解明し、そのことに関心を向けるように試みている。シェーファーのいうアポリア的状况とは、幻想であるようにみえる理性と自律性を主張することに固執することである。社会の状況は理性と自律性を実現することと対立しているが、だからといって社会の目的に独占されないようにするには理性と自律性の実現を放棄することもできない(vgl. Schäfer 1988; 1996)。教育学にとってアドルノが有する意義を探り、彼の革新的な理論を媒介としてビルドゥングの理論および大望の限界を見定めようとする哲学志向の試みとは別に、いわゆる「冷淡さの研究」と呼ばれる領域でアドルノの批判的な時代分析を継承しようとする試みもみられる。「市民世界の冷淡さ」(Bremer/Gruschka 1987: 19) への批判とそうした冷淡さの個体発生に関する研究(vgl. Gruschka 1994) は、一貫して実践的な意図をもって行われており、実証的な研究と結びついている(vgl. Gruschka 2004, S. 27ff.)。シェーファーはアドルノの「啓蒙の自己破壊的な特徴」への批判を踏まえた上で教育によって啓蒙しようとする大望に対しては慎重であり続けているが(vgl. Schäfer 2004, S. 56ff.)、グラーシュカによれば、批判的啓蒙の機関としての教育学理論が理論が衰退していることに鑑みれば、それは次のことにかかっているという。

批判としての理論を体系化し、教育学の目標設定のうちそのための基準を定着させること。なぜなら、成人性への教育の独自構造について語られる際には教育目標の妥当性について事実と異なる想定が正しいとされているからである。したがって求められるべきは、教育学の本質には矛盾があ



るということを検討することで教育とはこういうものであると自らが主張するものと実際の教育が異なってしまうのか理由を検討することである。[……] その場合、教育学と社会の関係性を時代診断的に説明しようとする動機は実践的なものであり続ける。その動機とは、教育学自体を不必要にするような教育学について先んじて考えておくということだ。教育学はすでにそのようなものとなっている。(Gruschka 1987: 13, こうした見解に対する批判としてSchäfer 2003: 134f.を参照。)

こうしたアプローチによって、アドルノの「似非ビルドゥング論」は歴史的に適切なビルドゥングの基礎理論として読まれるだけではなく、彼の時代診断もまた更新される。刊行から30年経って、ミヒャエル・ティッシャーは「似非ビルドゥング〔論〕は廃れてしまったのか」という問いを投げかけている。予備知識もなく、より多くの誤認によって古典哲学の書物に向かう似非教養人の例としてアドルノが挙げていることは (vgl. GS 8, S. 112)、現代では時代遅れになっているように思われる。今日、自らのビルドゥングのために、あるいは教養人になろうとして、カントの『純粹理性批判』やスピノザの『エチカ』を読む者などいるのだろうか。多くの人が「本物の」似非教養人〔に関するアドルノのイメージ〕に対してすでに違和感を抱いている。というのも、ビルドゥングは至るところでそのオーラを失い、望ましいと思われることがほほなくなりつつあるからだ (Tischer 1990: 10)。だが、このことは似非ビルドゥングが消えたことを意味するわけではない。むしろ逆に、似非ビルドゥングは拡大している。今日におけるミュージアムの流行、入場者数が何十万人から何百万人にも及ぶ展覧会、書籍販売数、演劇やオペラの劇場訪問者数に、そのことは顕著に表れている。つまり、アドルノの分析は時代遅れになったわけではなく、似非ビルドゥングそのものが変貌してきているのである。今や文化は体験として理解され、娯楽のために嗜まれる。それとともに似非ビルドゥングも変容した。似非ビルドゥングは、その範型であったビルドゥングもとともに、その基準と真摯さを喪失し、その結果として「皮肉にも純化」(ebd.) されてしまうのである。似非教養人の虚栄心は見透かされはするが、批判されることはなく、

また拒否されることもない。

批判的教育学にとって、似非ビルドゥングの〈ジレンマ〉は深刻なものとなる。「生徒たちの多くがビルドゥングにも、それどころか似非ビルドゥングにもまったく注力することもなく、肩をすくめながら学校で学ぶ内容は自分の関心領域にとって重要でないと言うようになれば」(ebd., S. 18)、「意味あるものを志向するビルドゥングの価値に対する批判的な主張」(ebd.)は疑わしいものとなるだけではなく、無力なものになってしまう。だが、もはや当然となってしまった「文化産業の生産品」(ebd.)との接触がもたらす残酷な愚鈍化作用に鑑みるならば、批判的教育学は教育機関ビルドゥングスインスティトゥイオーネンによるビルドゥングの要求を放棄することはできず、またそうしようとしてもしないだろう。このジレンマに直面してなお残されるのは、教育機関と、その教育機関を批判する似非ビルドゥングとが手を取り合うことだけではないだろうか。

## 訳者注記

本稿 (Wigger, Lothar, Kritik der Halbbildung: Eine Einführung in Theorie W. Adornos Bildungs Theorie) は以下の文献における第10章をもとにして執筆されている。Dörpinghaus, Andreas / Poenitsch, Andreas & Wigger, Lothar, 2013, *Einführung in die Theorie der Bildung*, Darmstadt: wbg, S. 81-91. ただし、同書をもとにして論文として抽出した際に、論文タイトルおよび文献一覧に加筆修正が施されている。著者であるヴィガー氏および同書の出版社による承諾を受けてここに訳出した。

訳文の表記について以下で言及しておきたい。アドルノのドイツ語版全集については、ヴィガー氏のドイツ語論文の凡例に従って巻数を略号で示した。たとえば「GS 8」は全集 (Adorno, Theodor, W.: *Gesammelte Schriften*) の第8巻であることを示している。原文のイタリック体については、専門用語やキータームが示されている場合には〈 〉で囲み、たんなる強調を示している場合には傍点を付した。原文で〈 〉が使用されている箇所については、引用、強調、専門用語の区別にかかわらず、いずれも「 」を用いた。原文における[...] (原著者による中略) は [……] と記した。原文において ( ) 内の人名表記、書名などは概ね原書の表記を用いた。略号である「S. (ページ)」「z. B. (例)」「vgl. (参照)」なども原書のままとしたが、一部、前後の文章と連なって使用されている箇所については訳文の平明さを考

慮して「たとえば」、「参照」などの日本語に置き換えた箇所がある。なお、訳文の平明さを旨として、訳者による補足を行った箇所がある。その際は、〔 〕を用いた。

邦訳にあたり最も熟慮したのは、ドイツ語の「ビルドゥング (Bildung)」の訳語である。本論文における最重要のキーワードとなっている「Halbbildung」は、これまで日本では「半教養」という語が当てられることが多くあった。「Bildung」はこの語が用いられる文脈によって、「教養」の他に、「陶冶」「人間形成」「教育」「文化」などと訳されることがある。哲学の議論におけるこの概念の基本的な意味は、自己と世界との共起的な相互作用とされることが多いため、「教養」と訳した場合にはこの概念が有する多様性が背景に退いてしまう可能性がある(「Bildung」概念の多様性については、ヴィガー、ローター・山名淳・藤井佳世編(2014)『人間形成と承認——教育哲学の新たな展開』北大路書房、を参照)。本論文の邦訳版では、以上のことを考慮して片仮名を用いて「ビルドゥング」と記し、読者にこの語の多様性を念頭に置いてお読みいただくこととした。なお、語のうちに「Bildung」を含むが日本語として片仮名で記すと違和感が生じると判断した場合には、適宜漢字を用いて記し(たとえば、「教育施設 (Bildungsinstitutionen)」「無教養 (Unbildung)」「陶冶財 (Bildungsgüter)」など)、そのうえで「ビルドゥング」という語を含むという痕跡を残すために該当する語の上にルビを振った。

訳出に当たって、まず花井がドイツ語版と英語版(ヴィガー氏による提供、未刊行)の両方を読んで邦訳を作成し、次に山名がドイツ語版により加筆修正を行い、最後に両者によって全体的見直しを行った。本論文で引用されている文献のうち邦訳されているものについては適宜参照させていただいた(文献一覧を参照)。ただし、本論文の文脈に合わせて訳文を変更した箇所があり、したがってここに示した邦訳文全体の適切性については両訳者の判断に基づくものである。なお、本稿の英語版を2021年度Aセメスターの学部授業「西洋教育史概説」(担当者は山名)におけるテキストの一つとして使用した。その内容についてともに検討して、その内容の理解を深めてくれた受講生にこの場を借りてお礼申し上げます。

(花井洸太・山名 淳)

## 文 献

ADORNO, THEODOR W. (1972): Theorie der Halbbildung (1952). In: Adorno, Theodor, W.: Gesammelte Schriften in 20 Bänden. Hrsg. von Tiedemann, R. unter

Mitwirkung von Adorno, G./Buck-Morss, S./Schulz, K., Bd. 8. *Soziologische Schriften I*. Frankfurt a. M. 1972, S. 93–121. = アドルノ, テオドール W. (2012) 『半教養の理論』(三光長治訳)『ゾチオロギカ』(三光長治他訳) 平凡社

ADORNO, THEODOR W. (1970): Ästhetische Theorie. In: Adorno, T. W.: Gesammelte Schriften in 20 Bänden. Hrsg. von Tiedemann, R. unter Mitwirkung von Adorno, G./Buck-Morss, S./Schulz, K., Bd. 7. *Ästhetische Theorie*. Frankfurt a. M. = アドルノ, テオドール W. (2007) 『美の理論』(大久保健治訳) 河出書房新社

ADORNO, THEODOR W. (1966): Negative Dialektik. In: Adorno, T. W.: Gesammelte Schriften in 20 Bänden. Hrsg. von Tiedemann, R. unter Mitwirkung von Adorno, G./Buck-Morss, S./Schulz, K., Bd. 6. *Negative Dialektik. Jargon der Eigentlichkeit*. Frankfurt a. M. 1973, S. 7–412. = アドルノ, テオドール W. (1996) 『否定弁証法』(木田元ほか訳) 作品社

ADORNO, THEODOR W. (1951): Minima Moralia. Reflexionen aus dem beschädigten Leben. In: Adorno, T. W.: Gesammelte Schriften in 20 Bänden. Hrsg. von Tiedemann, R. unter Mitwirkung von Adorno, G./Buck-Morss, S./Schulz, K., Bd. 4. *Minima Moralia*. Frankfurt a. M. 1980. = アドルノ, テオドール W. (2009) 『ミニマ・モラリア: 傷ついた生活裡の省察』(三光長治訳) 法政大学出版局

ADORNO, THEODOR W. (1953): Fernsehen als Ideologie. In: Adorno, T. W.: Gesammelte Schriften. Hrsg. von Tiedemann, R. unter Mitwirkung von Adorno, G./Buck-Morss, S./Schulz, K., Bd. 10.2. *Kulturkritik und Gesellschaft II. Eingriffe – Stichworte – Anhang*. Frankfurt a. M. 1977, S. 518–532.

ADORNO, THEODOR W. (1960): Einleitung zu einer Diskussion über die „Theorie der Halbbildung“. In: Adorno, T. W.: Gesammelte Schriften in 20 Bänden. Hrsg. von Tiedemann, R. unter Mitwirkung von Adorno, G./Buck-Morss, S./Schulz, K., Bd. 8. *Soziologische Schriften I*. Frankfurt a. M. 1972, S. 574–577.

ALBRECHT, CLEMENS; BEHRMANN, GÜNTER C.; BOCK, MICHAEL; HOMANN, HARALD; TENBRUCK, FRIEDRICH H. (2000): *Die intellektuelle Gründung der Bundesrepublik. Eine Wirkungsgeschichte der Frankfurter Schule*. Frankfurt a. M.

BREMER, RAINER / GRUSCHKA, ANDREAS (1987): Bürgerliche Kälte und Pädagogik. In: *Pädagogische*

- Korrespondenz. Zeitschrift für kritische Zeitdiagnostik in Pädagogik und Gesellschaft.* Heft 1, Wetzlar, S. 19–33.
- GRUSCHKA, ANDREAS (1994): *Bürgerliche Kälte und Pädagogik. Moral in Gesellschaft und Erziehung.* Wetzlar.
- GRUSCHKA, ANDREAS (2002): Unvermeidbar und ohnmächtig – Thesen zum Bedeutungswechsel der Bildung. In: *Pädagogische Korrespondenz. Zeitschrift für kritische Zeitdiagnostik in Pädagogik und Gesellschaft*, Heft 28, S. 6–31.
- GRUSCHKA, ANDREAS (2004): Empirische Bildungsforschung – das muss keineswegs, aber es kann die Erforschung von Bildungsprozessen bedeuten. Oder: Was lässt sich zukünftig von der forschenden Pädagogik erwarten? In: *Pädagogische Korrespondenz. Zeitschrift für kritische Zeitdiagnostik in Pädagogik und Gesellschaft*, Heft 32, S. 5–35.
- HEYDORN, HEINZ-JOACHIM (1970): *Über den Widerspruch von Bildung und Herrschaft.* Frankfurt a. M.
- HORKHEIMER, MAX (1988): Traditionelle und kritische Theorie (1937). In: Horkheimer, Max: *Gesammelte Schriften.* Hrsg. von Schmidt, A., Bd. 4: *Schriften 1936–1941*, Frankfurt a. M. 1988, S. 162–216. = ホルクハイマー, マックス (1998) 『批判的理論の論理学：非完結的弁証法の探求』(角忍・森田数実訳) 恒星社厚生閣社
- HORKHEIMER, MAX (1985): Begriff der Bildung (1952). In: Horkheimer, Max: *Gesammelte Schriften.* Hrsg. von Schmidt, A., Bd. 8: *Vorträge und Aufzeichnungen 1949–1973.* Frankfurt a. M., S. 409–419.
- HORKHEIMER, MAX / ADORNO, THEODOR W. (1947): *Dialektik der Aufklärung. Philosophische Fragmente.* In: Adorno, THEODOR W.: *Gesammelte Schriften in 20 Bänden.* Hrsg. von Tiedemann, R. unter Mitwirkung von Adorno, G./Buck-Morss, S./Schulz, K. Bd. 3. Frankfurt a. M. 1981. = ホルクハイマー, マックス/アドルノ, テオドール W. (2007) 『啓蒙の弁証法』(徳永恂訳) 岩波書店
- KLAFKI, WOLFGANG (1991): *Neue Studien zur Bildungstheorie und Didaktik. Zeitgemässe Allgemeinbildung und kritisch-konstruktive Didaktik.* Weinheim.
- PAFFRATH, FRITZ HARTMUT (1992): *Die Wendung aufs Subjekt. Pädagogische Perspektiven im Werk Theodor W. Adornos.* Weinheim.
- PEUKERT, HELMUT (1983): Kritische Theorie und Pädagogik. In: *Zeitschrift für Pädagogik*, Jg. 29, Heft 2, S. 195–218.
- SCHÄFER, ALFRED (2004): *Theodor W. Adorno. Ein pädagogisches Portrait.* Weinheim; Basel; Berlin
- SCHIEBLE, HARTMUT (2002): *Theodor W. Adorno.* Reinbek, 6. Auflage.
- SCHWEPPENHÄUSER, GERHARD (1996): *Theodor W. Adorno zur Einführung.* Hamburg. = シュベッペンホイザー, ゲルハルト (2000) 『アドルノ：解放の弁証法』(徳永恂・山口祐弘訳) 作品社
- TISCHER, MICHAEL (1990): Veraltet die Halbbildung? Überlegungen beim Versuch, die Theorie der Halbbildung zu aktualisieren. In: *Pädagogische Korrespondenz. Zeitschrift für kritische Zeitdiagnostik in Pädagogik und Gesellschaft*, Heft 6, Wetzlar, S. 5–21.
- WIGGERSHAUS, ROLF (1986): *Die Frankfurter Schule. Geschichte, Theoretische Entwicklung, Politische Bedeutung.* München; Wien.